

平成27年4月1日発行 春燈/第70巻第4号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

Apr 11 2015

4 月号



主宰の句

安立公彦

うぶすなの神駭かすはつ烏

浦安にのこる日の路地福寿草

高だかと八朔の黄や切通し

野火立つや呼応の男ごゑ東西に

あゆみゆく明日への一步二月尽



成瀬櫻桃子の句

校庭の山羊にも別れ卒業す

『素心』昭和五十六年

娘、美菜子十九歳にて小学校卒業証書を受く」の前書がある。昭和四十年四月、長女美菜子さんは十歳で神奈川県大磯町の「素心学院」に入院、このとき九年の時がたっている。入学や卒業の年齢を思うと、櫻桃子先生の胸に溢れるものが伝わってくる。

のどかな十七文字は、前書によって、山羊のいる校庭に立つ先生の姿を、ありありと浮かび上がらせている。

岩永はるみ

成瀬櫻桃子の句

「マタイ受難曲」百蝶翅をたたみけり

「春燈」平成九年

信仰の悲しみ、という関根正二の絵がある。何故、信仰に悲しみという形容が纏うのか。しかし美しい。より良く生きんとする者にとり、信仰は限りなく悲しい。マタイ受難曲でイエスは最後に「我が神我が神なんぞ我を見捨てたまいし」と叫び息絶える。百の蝶は秘かにその翅を合掌の如く閉じる。この静寂さは、現世に正にある神の贖いと、その神への信頼感なのではあるまいか。

佐々木良玄

燈下集

○ 豊谷青峰

狐火に逆らふ風もなかりけり

歌垣の里の細道初筑波

鷹匠に戻らぬ鷹やビルの街 (浜離宮)

藁苞を透かす日差や寒牡丹

探梅の茶席に届く水の音

○ 高埜良子

冬日浴ぶ古りし勅額文字の照り (田宮寺)

臘梅の崇むる古刹深空まで

寒牡丹紅の濃く揺れ通り風

凍蝶や八方睨みの白龍図

梅白し七堂伽藍鳥のこゑ

○ 吉川隆

浮雲に心遊ばせ初御空

風神に攫はるまじと春着の娘

山手線小雪舞ふ景ありにけり

公園の古書市灯り暖かき

道端の拗ねる子憎しひめつばき



○ 三代川玲子

冬草の日を恋ふ背丈伸ばしたり

怒号めく声飛び交へる野焼かな

探梅や石仏ならぶ一と処

産土の節分奉納神楽かな

立春大吉梢のさゆらぐ大樹かな

○ 本田 保

初神籤突つて済ますだけの事

初御空筋斗雲の孫悟空

歳時記を消化しきれぬ寒さかな

小寒や同じ過ち繰返し

「御破算で願ひましては」年の暮

○ 瀬戸 峰子

昏睡の娘に窓の外の雪無音

昏睡を見守るだけや冴返る

昏睡の峠越えたり冬木の芽

オリオンの瞬き著く冴返る

立春や朝のつぶやき川の音

○ 棗 怜子

風邪だけは外かぬが唯一自慢かな

母の齡越えて母恋ふ虎落苗

七草粥祈りをこめて啜りけり

恙無き夫の寢息や寒の明

みどり・みほ・世葉・夕衣・みずき・お年玉(孫娘の名)

○ 今井 弘雄

紅を引く顔の明るき女正月

ロボットに認知症なしちゃんちゃんこ

鈍行の窓の日差や春隣

ふる里は姉ひとりきり鬼やらひ

初午や片目をつぶる招き猫

○ 竹内 慶子

寒昂見つむや胸を熱くして

目に見えぬまなざし寧し寒夕焼

底冷や猫とぬくもり頒ちつつ

まゆ玉を熱く語りて散会す(春燈新年太舌)

北国の春流水の初日より

○ 清水 美子

笑ひの輪繋ぐ絆や去年今年

初髪や簪ゆるる黄金色

江戸にぎはひの絵巻に見入る女正月

初場所や男の意地の張りどころ

春を呼ぶ茶筌に残る色香かな

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

嘴太の初鴉とて鴟尾の上

梅探す延喜の御社登りかね

白梅の一輪今日の幸充たす

風を切る寒雁棹を撓めつつ

五臓六腑七草粥を頂きぬ

○ 吉村さよ子

寒風によぢれひろぐる鶺鴒の翼

弛みなき藍の文様冬深し

賽銭を頭上に布袋春を待つ

紅の色空にとかして冬桜

節分のなにごともなき猫のかほ

○ 後藤眞由美

武蔵野の風のごゑ聴く大旦

あら玉の満月あかし瑞々し

大川や正月凧のふたつみつ

冬の靄息もて出づる大き犬

せせらぎの光さざめく寒の明

○ 那須禮子

初鏡ひそかに期する眉を引く

白梅やはたちの髪のかんじり上がり

冬日和オーロラを観る国へ旅

漢方薬氣長に信じ寒土用

ふらここに身を任しゐる四温かな

○ 小淵二美江

独り身となりて新年迎へけり

臘梅の香るや夕日宿しつつ

裸木に向き合ふ黙や番鳥

冬入日遺影の頬にかかりけり

久女忌や草萎れたる野に独り

春燈の句

安立 公彦選



春浅し故国の花粉思ひをり

風光る托鉢僧の肌の色

節分や鬼に囲まれ暮らす日々

若しかして人生まるごと蜃気楼

遠からぬ西方浄土に御慶かな

妻生れし二日や美しき富士の山

猫抱いて蓬萊めざす寝正月

探梅行誰が口遊ぶ早春譜

おのおのが森の踊り子枯木立

笹鳴を集めてゐたる日差かな

良く燃えて今年豊作どんどの火

飛行機雲の飛び込んでゆく霞かな

立春の海ゆつたりと目覚めけり

並木通り人みな美しき春の宵

パンコク 大口 堂遊

神奈川 石田 康明

神奈川 葦原 霞切

千葉 大湊 栄子

純白の椿一輪空に舞ふ

春なれや真砂女の海も波しづか

来し方の俳の道とも蝮の道

家中を灯しひとりの鬼やらひ

大根の素頸に寒の戻りかな

木魚にも序破急のあり春の雪

ひとすぢの煙ののぼる冬の山

寂れゆく故郷を抱き山眠る

枯るる中夕日の照らす赤き橋

到来の透ける白魚大吟醸

三世の話のはづむ掘炬燵

玉子酒夫のまぶたの仄紅し

東の間のかがよふ命薄氷

民宿に湖風匂ふ蜆汁

神奈川 新海 英二

島根 土江 比露

兵庫 秋山 葛

余言

安立公彦

しづかに降るだまつて見てゐる春の雪 菊地 肇子

この句の主意は、「だまつて見てゐる」という口語文体にある。目交に降る春雪、音もなく静かに降る春雪。それを見守る作者の思いは、この中七に凝縮される。

聞くところによると、作者はこの一月夫君を亡くされたとのこと。それを思うと、感情表現の一切無いこの句に、計り知れない作者の思いが籠かられていることを知る。作者は遙か以前、木下夕爾の門下だった。この句、俳句であるとともに、みごとな一行詩である。

同門の絆は固し繭団子

青柳 雅子

紅白の餅や団子を、若木の枝に挿した繭玉は、新年大会を飾るにふさわしい景だ。東京会館を会場としていた当時から、繭玉は万太郎、敦を祖とする「春燈」の新年大会の

中心にあり、その絆を深める景物だった。

今年の新年大会も、その繭玉のもと、和気藹々の雰囲気の中で進められた。まさに「同門の絆は固し」そのままの一景と言えよう。この句にはその気分を語る作者の思いが、よく表現されている。

三月十一日海かなしくもひろやかに

諸岡 孝子

東日本大震災から四年の日月が過ぎようとしている。作者の住む気仙沼も甚大な災害を蒙った地である。今四年が過ぎて、復旧の作業は順調に進んでいるのだろうか。

私たちの住むこの大地は、いつ大きな地震が発生してもおかしくないと聞く。しかしそれ故にこそ、私たちは現在の持場を大事に育成してゆかねばならない。作者はいま、そういう思いで目前の海を見ている。その海は過去の哀しみを秘めて、しかしひろやかに作者に語りかけてくるのである。自然の摂理と向き合う思いが切に表現されている。

風狂の道に幸あれ冬木の芽

菅澤 陽子

「祝」という前書が付く。句の友の祝事への挨拶句だ。この句、「風狂の道」がいい。周知のことながら、「予が風雅は夏炬冬扇のごとし」と芭蕉は説いた。これは芭蕉の、

「風雅」を説くための反語であろう。

作者はいま、「風狂の道に幸あれ」と祝す。賛成だ。風狂の道は千人千様。それぞれの人がそれぞれの風狂の道に精進しているのだ。それがひいては私たち春燈の抒情を高める道である。冬木の芽はやがてみごとな花をひらく。

互ひに名を呼び合ふ仲や冬まうらら

金山 雅江

「二月三十一日」の前書がある。この日は「愛妻の日」とのこと。語呂合せだ。私たちは代々「女正月」という日を決めていた。一月十五日。女性への慰労の日である。作者はいま「愛妻の日」に当たり、「互ひに名を呼び合ふ仲や」と伝える。それはそれぞれの家庭でいつしか慣いとなつていくことの一つだが、この句の場合は取りも直さず夫婦仲の円満を示すこと。「冬まうらら」がいい。

今日ほどに若き日はなし梅真白

沼田 桂子

「梅真白」には言祝ぎの意味が深い。そうすると、「今日ほどに」は、その言祝ぎを導く言葉となる。では「若き日はなし」をいかに解釈するか。

子規の説いた「写生」は方法論である。写生の対象は現存する「物」であるが、その「物」を認識する作者の「思い」を育て上げなくては、写生は完成しない。この句の、「若き日はなし」は作者の思いである。「今日ほどに」が中

七下五に働きかけ、その思いを育て同時に支えている。

寒紅をきりりと点し子を生きさず

佐々木 新

鈴木真砂女の第一句集『生簀籠』に、〈罪障のふかき寒紅濃かりけり〉という句がある。己が身の秘めた過去を諾う作として余りにも有名な句である。後年この句をカバーするように、〈寒紅や心の闇は覗かれず〉を成す。

掲出句。夫人を詠んだ作品か。一読中七の、「きりりと点し」に、その姿勢が描写されているのを知る。同時発表の句に、〈鯛しやぶに玻璃戸くもらす老い二人〉の作がある。「子を生きさず」の、「老い二人」か。しかし掲出句には、一句を通して清潔な緊張感が、豊かな情緒をもつて表現されている。真砂女の句の対極にある句と言えよう。

みどり・みほ・世菜・夕衣・みずき・お年玉 棗 怜子

正月、家族が揃った席で、幼い児にお年玉を渡すのは、楽しいものだ。受け取る子らの笑顔は、他に替え難い癒しとなる。この句、そういう子らの名を揃えただけの句であるが、読んでいて何やらほのぼのとした思いが湧く。

子らの名がいい。五人のお子さんみな女の子である。しかも五人の名が五七の調べとなつて、座五の「お年玉」に続く。作者にとつても記念すべき一句であろう。ただ、こういう表現は多用は出来ない。